無限の魂を持つ転生者

まりも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無限の魂を持つ転生者

【Ｎコード】
Ｎ０７８０Ｗ

【作者名】
まりも

【あらすじ】
なんかもうお約束通りに死んだ主人公。
神様にもらった能力は魂の塗り替え。
送られた世界で新しい生を送る主人公はどのように生きるのか？
無限の魂を持つ転生者。始まります。

プロローグ（前書き）

こんにちは。まりもです。
至らぬ点ばかりですが、ご容赦を。

プロローグ

死んだ・・・ｏｒｚ
そう思ったのは、ついさっき。
複数の男に囲まれていた女性を北斗神拳もどき（爆発しない）で倒したとき、
後ろで銃声が聞こえ、左胸に熱い痛みが走ったときだった。
心臓の最後の鼓動によって血液が俺の脳を通り過ぎるまでの間、
俺が唯一脳裏に映せたのは、死んだ・・・ｏｒｚだった。

あ、俺死んだんだ・・・ｏｒｚ
そう確信したのは三秒ほど前。
目が覚めたと思ったら目の前に長いひげのじーさんが居たときだ。
よく二次小説を読んでいた俺は、瞬時に予測することが出来た。
・・・テンプレ？・・・と。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

はい！やっぱりテンプレでした！
なるほど。あの弾は横の女性を狙ったものだったらしい。
しかもあの女性は、実はヤクザのボスって・・・。助けなきゃよかった。

「で、爺さん。どうするんだ？これから。」

「ふむ。お主にはアニメやマンガ・・・・つまり二次元の世界に行ってもらう。
残念じゃがどの世界かは選択できん。すまんの。わしも、全知全能ではないのじゃ。」

へー。神様って言ってもいろいろあるんだな。

「力とかってもらえるのか？」

「うむ、一つだけじゃが、何でもいいぞ。」

「ふむ。・・・・じゃあ。」

俺が生前考えた奴を言ってみる。

「じゃあ、魂の塗りかえで。」

「ふむ、どういう能力じゃ？」

「俺という魂を塗り替える能力。対象は俺が知っているアニメ、漫画、小説の全キャラクター。
俺という魂の上にキャラの魂をかぶせる。たとえばのび〇を選択した場合、俺の魂をの〇太の魂で覆う。
すると外見は俺でも、中身。つまり、思考も性格も動きも〇び太って分け。」

「なるほどな。」

「それと、そのキャラは俺の多重人格ってかんじにしてくれ。
あと、塗り替え中はそのキャラの能力、武器も使用可能に。
記憶は完全に共有。これで塗り替えていても俺の目的などがキャラに伝わる。」

「わかった。あと、わしからの好意で、魔力は多めにしておいてや

ろう。」

「ああ、ありがとう。魔力がなかったら何にも出来ないからな。」

「じゃあ能力をつけるぞ・・・。えいやっ！・・・これでいいはずじゃ。」

早ッ！？めっちゃ簡単そうにやったよ。この人。いや、神様。

「じゃあ早速・・・。だれにしようか・・・？じゃあセイバーで。」

イメージイメージっと。あ、体の感覚が・・・。

「神様。お腹がすきました。・・む。・・・・なるほどね。」

「どうじゃ？」

「塗り替え中も意識はあるんだな。ちゃんと記憶も共有されてるみたいだし。」

神様って言ったしね。

「でもさ、何でこんなに親切なわけ？」

「・・・・じつは、お前はある実験のために転生させられる。」

「ゑ？」

「アニメの世界に、転生者を送るとどうなるか・・・という実験じゃ。

お主には好きに生活してもらってかまわんのじゃが、永遠にアニメの世界をまわることになる。
つまり、お主には無数のアニメの世界すべてに行ってもらわねばならんのじゃ。永遠に。」

なるほど。そういうことか。

「別にいいさ。俺は全部楽しんで生きていくから。」

「・・・ありがとうの。じゃあ、世界に送るぞ。最初の世界だけなら、選択できるぞ。」

「まじ？じゃあ・・・・ネギまで。」

「ホントにいいんじゃな？」

「いいよ。出来れば時代は赤き翼が大暴れする少し前ぐらいで頼む。」

「わかった。本当にすまんの。この通りじゃ。」

そういって爺さんは頭を下げる。

「ちょっと！？頭を上げてくれよ。別にいいからさ。」

「・・・わかった。では、永遠の人生を楽しんでこい。」

爺さんの言葉と共に扉が現れる。

眩い光を放つその扉に、俺、斉藤霧弥（サイトウキリヤ）は足を踏み入れた。

プロローグ（後書き）

さて、頑張らないと。
あ、使うキャラなどのアイデアをくれると嬉しいです。

ご飯の恨み。そしてバグ認定。（前書き）

書いた後思った。
一人一人の視点が短い・・・。

ご飯の恨み。そしてバグ認定。

視点　霧弥

お、おおおおお！？

扉に入ったと思えば・・・。

何で俺は落ちてんのおおぉ！？

やばい、速度がやばい。落ちたら死ぬ。絶対死ぬ。

な、何とかしなければ！

えっと、えっと、・・・「あ、相川歩！」ドグチャ！「グハッ！？」

「な、何だよいった・・・・・あ、危なかった。ゾンビパワーすげえ。」

すまない歩よ。グチョッとさせた上にセリフを切っちまった。

あ、何だよいった、までが歩でそこから先は俺だよ。

あのまま落ちたら絶対死んでた。俺はただの人間。

能力を使わなければただの人間。大事なことなので二回言いました。

ピラッ

ん？何だこれは？

えっと何々？手紙？神様から？

〜お主のネギまの世界の原作知識はこちらの都合で消しておいたから。ガンバ☆〜

なんだってー！・・・・ちょっと待てよ・・・・。

うん、やっぱり無理。ネギまって言う世界だってことと、アラルブラって奴のことしか思い出せない。

グウ〜〜。

やばい、腹減った。

視点　アルビレオ

ふふふふふ。こんにちは。アルビレオ・イマです。

今日の私たちの昼食は旧世界の日本の料理だそうです。

鍋料理・・・と言いましたか。

「じゃ、早速肉を・・・」

ナギは気が早いですね。

「あっナギおまっ・・何肉を先に入れてるんだよ！？」

「いいじゃねえか、旨いもんから先でよ。」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

ゼクト、それは・・・。

「バッバカ！火のとおる時間差というものがあってだな・・・。」

「あーうっせ、うっせーぞ。えーしゅん。」

ひょいひょいっ

ナギは次々と肉を入れていきます。

それを止める詠春。たしか・・・。

「ふふ・・詠春、知ってますよ。日本では貴方のような者を・・・鍋将軍と呼び習わすようですね。」

「ナベショーグン！？」

「つ・・強そうじゃな。」

ナギとゼクトが驚愕に目を見開いています。
その時でした。空から少年が降ってきたのは。

視点　霧弥

俺があのあとどうなったか簡単に説明しよう。
いいか？かんたんにだぞ？
よし・・・・実は俺・・・・拾われた。
「うぐっ！？」
「霧弥！大丈夫か！？」
詠春が背中をバシバシとたたいてくる。
「んぐぐ・・・ぷはあっ！はあっはあっ・・・死ぬかと思った。」
シイタケがつるんって・・・。

「霧弥、なにやってんだよ。」

「大丈夫でしたか？」

「大丈夫だよ。」

・・・とまあこんな風にアラルブラに拾われて、鍋を頂いてます。

出合ったときに誰なのかがわかったから、アラルブラだって分かった。

ちなみに若返ってた。１４歳くらいに。

「それにしてもなぜ空から？」

「いや、俺もあんまり意味が分からないん｛ゴシャッ｝・・・だ？」

いきなり空から剣が・・・。あつい。鍋の中身が掛かった。飯食いそびれた。

・・・詠春なんて鍋かぶってる。ひどいなあ。・・・ふざけんなゴラ！

「お食事中失礼！・・・（霧弥はここまでしか聞いてません。）」

お食事中失礼だと！？失礼だと思うなら待ってろよ！

「ハハハハ（フフフフ）俺の食事を邪魔する奴は（食べ物を粗末にするものは）・・・」

「「斬る」」

まずは詠春が飛んだ。俺は飛べないから準備しとく。

あの筋肉ダルマをぶっ飛ばすため。

俺って筋力も一般人並だから。塗り替えしたらどうか分からないけど。

「お、詠瞬の攻撃凌いでるぜ。」

「あの大男、やりますよ。見た事があります。ちょっと前南で話題になった剣闘士ですよ。」

へー。そろそろ塗り替えするかね。

やっぱりご飯の恨みと言えばセイバーでしょ。

「塗り替え、セイバー。・・・・食事の邪魔をする輩は許しません。」

こうして、俺の魂は塗り替えられた。

視点　詠春。

ガキキンッ

これで何度目かの打ち合い。

なるほど、この男、かなりやる。

「ちょっ！タンマタンマ。あんたマジでつえぇな。ちょいまたね？」

この男、何を・・・。

「ふざけるなっ。やる気なら本気をだせ貴様っ！」

「へっそースか！けど四対一だし本気出す訳にはいかんのよね。あんた達の情報はリサーチ済みだぜ！」チャッ

なんだ？カプセル？何が入っているんだ。

ポイッポイ。

何が出てきても大丈夫なように構える。

ポポンッ

「ブッ！？」

ななななな、なぜ全裸の女性が四人も・・・。

「情報その一。生真面目剣士はお色気に弱い。」

ぽにょぽにょ。

「ぐっ・・卑劣な。いや、何のこれしき、心頭滅却すれば火もまた

――「ゴンッ」ブバッ！？」

「ホイ一丁上がり。」

視点　セイバー

あの剣士、なかなかやりますね。

しかし、狸の置物で殴られて負けると言うのはどうでしょうか？

いま、〔保険〕と言う札をつけた少女に殴られ、剣士が負けました。

情けないですね。私は女なので大丈夫です。・・・体は男ですが。

とにかく、いまはあの男です。あの男に制裁を加えねばならない。

私は男のいる高台まで飛びます。

「おっ？」

「我が名はアルトリア。食物を粗末にする愚か者に制裁を加えに参

上した。・・参る。」

「あれ？こんな奴データになかったぞ？新参か？」

「余所見をしている暇が・・・あるのですか！」

エクスカリバーで横薙ぎに一閃。

ガンッ

「おっと、あぶねえなあ。」

折れた剣で止められました。やりますね。

「ハアァッ！」

エクスカリバーで切りかかる。

「やべっ、ぬふん！」

「なっ！？」

地面を抉り取って石つぶてに！？

「はっ！」

横に飛び、かわす。まずい、距離が開いた。

「いくぜっ！ラカン・・・インッ・・パクトォ！」

ものすごい量の気の奔流。これはさすがにまずい。ですが、私には防ぐ手段がある。

「全て遠き理想郷（アヴァロン）！」

これが、私の最強宝具。聖剣エクスカリバーの鞘。アヴァロン。

この宝具はすさまじい治癒能力を持ち主に与えると共に、老化も停止させ、外部からの攻撃を完全に遮断する。

つまり、最強の防御です。

「なにぃ！？無傷だと！」

「それだけですか。ならば、次はこちらがいきます。」

私はエクスカリバーを構える。

「エクス――――――」

「大呪文か！？気合防御！」

「カリバーーーーーー！」

「へ？ちょっま、やばいって。」

男を襲う光の奔流。その本流は容赦なく男を包み込む。

「ぐ・・がああああ！」

・・・光が収まる。少し先には、男が立っていた。随分と傷を負っていますが。

「まだ立つ事が出来るとは、賞賛に値します。」

「へっ、強いながきんちょ。もっとやらね？」

「いえ、遠慮します。大分怒りも収まってきたので。あとは、ナギとでもやってください。」

「じゃ、そいつを倒して、もういっかいだ！」

「分かりました。約束します。では。・・・・・ふう。なあ、ちょっと頼みが。」

「へ？なんかいきなり雰囲気が変わったな。まあいいや。何だ？」

「あのさ・・・・下まで、運んでってくれ「ガラッ」・・・へ？」

あああああ～。おちる～。

視点　アル（アルビレオ）

私たちは、詠春を介抱しながら霧弥の戦いを見ていました。

ここまで声は届きませんが、霧弥が剣で戦っています。

正直、霧弥があそこまで戦えるとは思いませんでしたが。

あ、男が距離をとりましたね。大きいのを放つ気でしょうか？

霧弥は大丈夫ですかね？

「あれはまずいのう。」

「おや、ゼクトもそう思いますか。」

「あれだけの気が集まっていったら誰でも気づくと思うがのう。」

「それもそうでしたね。しかし、霧弥は大丈夫でしょうか？」

「まあ、霧弥はまだ子供だし、相手も手加減するじゃろう。」

その瞬間、相手の攻撃が放たれました。

「・・・・・あれは手加減しているのでしょうか？」

「・・・・・手加減なしじゃな。」

攻撃は霧弥に近づいて行きます。

そして、攻撃が霧弥に当たった！・・・と思った瞬間、攻撃は誰もいない方向へと飛んでいきました。

「いまのはなんじゃ？」

「反射・・いえ、攻撃を霧弥に干渉させなかった感じですかね？魔法具でしょうか？」

「じゃが、それほどの魔法具ならもはや封印級じゃ。それほどの魔法具ならアルも分かるじゃろ。」

「そうですね、しかし、あれが何かは分かりませんね。」

「つまり、何らかの魔法か、いまだ発見されていない魔法具と考えたほうがいいのではないか？」

「そうですね、あ、霧弥も攻勢に出るようですよ。」

霧弥も、自身の剣を掲げ、振り下ろしました。

「エクス――――――」

霧弥の魔力が剣に集中していきます。あの剣も魔法具でしょうか？

「カリバーーーー！」

霧弥の剣から、極大の光の奔流が放たれます。

「なんじゃあれは！？」

「霧弥もバグでしたか・・・・。それに、エクスカリバー。たしか旧世界の・・・。」

調べてみましょうかね。

む、あれは・・霧弥が落ちてきました。

上を見ると足元であっただろう場所が崩壊してます。

あ、地面に・・・。生きてますね。

さて、いろいろ聞き出しましょうか。

視点　霧弥

落ちていってしまったけど、無事生還を果たした。

スマナイ、歩・・・。

そして早々にあるとゼクトに聞かれたんです。

「「あれはなんだったのですか（のじゃ）！？」」

えっと、あれって？エクスカリバーとか？

「えっと、俺の魔法だよ。」

「魔法だったんですか？あれ。」

ええっと、もう能力の説明したほうが早くね？

「えっと、俺の魔法は魂の・・・（以下略）」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「つまり、先ほどの貴方は、英雄、アーサー王となっていた。それでいいのですか？」

「まあ間違いはないな。」

「他の人物にもなれるのですか？たとえば、アーサー王伝説のサー・ランスロットなど。」

「まあ、その人物の知識さえあればたぶん。ちなみに、アルにもなろうと思えばなれるぞ。」

「絶対にならないでください。」

そんなに嫌か？

「ゴホン、まあまとめると、後ろで戦ってる二人に加え、あなたもバグだと言うことですね。」

いや、どうまとめたらそうなるの？

それに俺はただの人間だから！バグじゃないから！バグじゃないから！大切なことなので（以下略

結局バグに認定されました・・・。とほほ。

ご飯の恨み。そしてバグ認定。（後書き）

えっと、今後使って欲しいキャラなどがありましたら、感想にお願いします。

戦争開始イィーーーー！　（前書き）

短すぎる・・・。ネタが・・・・。

戦争開始イィーーーー！

皆さんこんにちは。霧弥です。

あのバカ筋肉もといラカンの襲撃から数日が経ちました。

俺とラカンは紅き翼のメンバーとなり、ナギたちと行動を共にしてきました。

ちなみに今は戦争中です。

最近戦争がよく起こるんですよ。

そこで俺たちの出番ってわけです。もういくつも戦争を鎮火させています。

殺した人数は１００から数えるのをやめました。

最初はビビったし超鬱モードになったりしましたが、もう慣れました。

ちなみに、僕も活躍してるんですよ。

相手の飛行部隊をバベルガグラビドンで一気にペシャンコにしたり。

ソーンウィップ！ワン！ツー！スリー！・・・したり。

ＩＳ乗り回したり。

カメハメハー！だったり。

まあ、いろいろとやっているのです。

前線に出ずに傷を負った兵士達の回復に努めたりもしてました。

で！今回はなんと前線ですー。わーぱちぱち。

「なあジャック。俺は何をすればいいの？」

あ、ジャックって言うのは馬鹿筋肉のこと。Ｊ（ジャック）・ラカン。

「まあ、いつもみたいに暴れればいいらしいぞ。」

「そうかいな。アル。俺はどうしたらいい？」

後ろから「俺の言ったこと無視！？」とか聞こえてくるけど気にしない。

「そうですね。敵の本陣はナギや詠春が行くので、霧弥は敵兵をこちらの陣地の入ってこないように食い止めてください。」

「ほら！おれの行ったとおり暴れればいいんだよ！」

「ジャック。全然違うからな。お前が言うと本当にそれでいいか心配になる。」

「ッチ！しょうがねえ。俺だけで暴れてくる！」

ジャックは飛んでいった。

「じゃあ、俺も行って来るよ。アル。」

「頑張ってくださいね。」

さて、今日は誰にするかね。

ちなみに、俺の人格でも魂としゃべることが出来るんです。

一つの魂ならば、俺の魂の横に置く感じで会話が出来るんだそうです。

よく出てくるのは、ギルガメッシュですね。きっと退屈なんでしょう。

誰としゃべるかは、決められないそうです。

まあ、簡単に言えば、もう一人の僕！とか、ＡＩＢＯ！の奴と同じようなものですね。

というわけで、新しい発見だったわけです。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ＡＡＡＡＬａＬａＬａＬａＬａｅｉ（アアアアラララライッ）！！」

戦場にはやっぱり戦車が似合うぜーーー！

こういう戦争ではＦａｔｅの宝具がとても便利です。

そして今乗っているのは、第四次聖杯戦争、ライダーこと征服王イスカンダルの宝具。

ゴルディアス・ホイール。

二頭の神牛の引く雷撃を纏った戦車は敵のど真ん中につっ込み、敵の陣営を次々と崩していく。

その姿はまさに蹂躙。征服王にふさわしいで光景ある。

敵陣営の半ばまで来たとき、イスカンダルが、俺の声で声を出す。

「ん？」

どうしたんだ？何か不具合でも？

「いやな、目の前に坊主の仲間がいるんだが、このままだと轢いてしまう。

かといって止まれば集中砲火を浴びることになるからな。どうするか悩んでいた所だ。」

なるほど。どんな奴だ？ってか坊主って呼ぶな。

「やたらでかい剣を振り回しておる。」

なるほど。ジャックか。

なら轢いてもいいぞ。きっとバグだから平気だろう。きっと。たぶん。おそらく。

「わかった。多少は手加減するから何とかなるだろう。」

じゃあ、がんばって。

「ほらほら！避けぬと危ないぞ？ジャックとやら！」

「ほへ？霧弥？って、ちょっと待てええええ！のわあああああ！」

まずはじめに二匹の神牛による蹂躙。

そして、本命の戦車（チャリオット）による蹂躙。

それを終え、通り過ぎた後、後ろを向くとまだ生きていた。

体が原形をとどめている時点でものすごく手加減をしていることが分かる。

おそらく、攻撃に回す力を、速度に回したのだろう。

なら、生きていてもおかしくはない。それでも並の人間には十分脅威だが。

後で謝らないと。

「ＡＡＡＡＬａＬａＬａＬａＬａｅｉ（アアアアラララライッ）！！」

征服王の声は、体は俺なのに、戦場全体にまで響き渡るほどの雄叫びだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

はい。こんにちは。あれから一日が経ちました。

昨日の戦争は大活躍でしたよ。怒られたけど。

ジャックに平謝りした後、今日のグレートブリッジ奪還作戦では、後方からの支援をすることになった。アルに言われて。曰く、

「あなたはもう前線に出ないでください！」

だそうです。

というわけで今回は後方からの支援をしているわけですが・・・。

「滅びのバーストストリーーム！」

ズギャアアアン！

「粉砕！玉砕！大喝采！」

頑張ってもらってます。社長に。

「フハハハハハァ！アルティメットバースト！」

ドガアアアン！

「強靭！無敵！最強！」

バガアアアン！

「フハハハハハハハハハハハハァ！」

ボカアアアン！

「オベリスク！ゴットハンドクラッシャーーー！」

ドゴオオオオオン！

「フフフフフフフフフ、ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡハハハハハハハハアアアァ！！」

うわぁ。なんてこった。酷過ぎる。

だが！これで終わる俺ではないのですよ！

いけ！金ぴか傲慢王！ギルガメッシュ！

「ふん。雑種どもが。この俺に戦を仕掛けるなど笑止千万。まとめ

て滅ぼしてくれる！」

いや、戦を仕掛けたのはどっちかというと俺らの方・・・。

背後に王の財宝（ゲートオブバビロン）が展開される。

そこから顔を覗かせるのは・・・・・無数の宝具の群れ。

その宝具は一気に敵の頭上へと降り注ぐ。

しかもすべてが宝具。ともなるとただの人間に防げるわけもなく、宝具の群れは次々と人を切り裂く。

そしてブルーアイズと、宝具によって大きく戦力の削られた相手の陣地に味方の軍が突撃する。もはや勝負は決まった。自分達の勝利で。

ナギたちも遠くで暴れている。ジャックなどは戦艦すら切り落としながら猛進している。

鬼神兵は、大方かたずけておいたので、詠春もゼクトもアルも、阻むものなどない。

味方の軍も、それを見て士気が上がり、敵陣に突入している。

自分の兵力。相手に兵力。陣形に地形。

その全てを把握し、味方の活路を開くことが出来るように宝具を放つ。

それが的確に行えた事で、兵士一人一人の負担が激減する。

まさに、戦場を支配していたのは、ギルガメッシュだった。

って言うか酷くね？ｆａｔｅの宝具って。

戦争開始イィーーーー！　（後書き）

ネタがなくなってきた。
主に使うキャラとかキャラとか。
頑張らないと。まだ見てないアニメも見ようかな？

何度も言うが俺はただの人間なのだｂｙ霧弥（前書き）

更新遅れました。すみません。
感想や、アドバイスなどは常時お待ちしています。

※なぜか更新しても、他のユーザー様から見ると更新されていないという事態が起こったので、一度四話をを削除し、もう一度更新しなおしました。

何度も言うが俺はただの人間なのだｂｙ霧弥

グレートブリッジを争奪してから少し経った今日。

新たにガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグらを仲間に加え、俺たちのファンクラブができ、俺に二つ名が出来たりと、いろんな事が有ったここ数日。

ちなみに俺の二つ名は、『悪魔の多重人格者』や、『戦場の殲滅悪魔』や、『青眼白龍の主』とかだ。妙に悪魔とかが多いのは不服だけど。

それで、ガトウは実力も然ることながら情報収集に長けているところがあり、そのガトウが持ってきた情報により連合、帝国。両方の国の中枢まで手を伸ばしていると言う秘密結社、『完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）』の存在が判明。

そして今、協力者にあってほしいといわれ、本国の首都（メガロメセンブリア）に来ていた。

いろいろ端折ったが、まあ、今の状況はこんな感じだ。説明が下手ですまない。

「で、協力者って誰なんだよ？ガトウ。」

「まあ、焦るな霧弥。じきに来るはずだ。」

ふ～ん。・・・・あれか？あの人は確か・・・

「マクギル元老院議員！」そう、それそれ。良く分かったな。詠春。

「あんたが協力者か？」

いや、敬語くらい使おうぜ。ジャック。

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ。」

カッカッと、音が聞こえてくる。あー。なんか緊張してきた。

≪俺も緊張してきた・・・・。≫

ちくしょう！役にたたねえ！何で今出てくるのが歩なんだよ！？

なんだ！？いつも盾に使ってる仕返しか！？そうなんだな！？

出来ればもっとこういう場面に強そうな奴であってほしかった・・・・。

≪そこまで言われるとちょっと凹むな・・・・。≫

凹んでやがれ！↑八つ当たり

でででで、だ、誰が来るんだ！？

「ウェスペルタティア王国王女・・・・アリカ様だ。」

大物キターーーーー！や、やばい・・・・意識が・・・・。

≪お、オイ！意識失うとかマジやめろよ！どんだけ緊張してるんだ

！≫

いや・・・でも・・・意識・・が・・・。

≪しょうがない！俺が出てやる！ドチクショウ！≫

その言葉を最後に俺は意識を失った。

★

俺が意識を取り戻したのは、意識を失ってから数時間ほどたってからだった。

≪お？起きたか？よかった。さっさと変われ。俺は疲れた。≫

分かった。助かったよ。ありがとう。

「・・・・っとと・・。」

ふう、まさかあんなことになるなんて・・・。

何度も言うが俺はただの人間なのだ。ナギ達と同じにしてもらっては困る。

さて、皆はどこだ？あっちかな？

・・・・・居た居た。

「おーいアル！」

「おや、霧弥。目覚めたのですね。」

「おう。俺の精神は弱かったようだ。」

「そのようですね。」

そんなあっさり肯定せんでください・・・。

「そうそう。霧弥。貴方の半生を「ワハハハハハ！」・・この話はまた今度。」

「あ、ああ。で、なに？あいつら。また殴り合いでもしてるのか？」

建物の影から覗いてみる。そこには、ジャックとナギが居た。

「上手いことやりやがって！こんガキャ！」

「ああ！？何の話だよ！？」

「とぼけんじゃねーよ！お姫様とイチャイチャワイワイお喋りして

たろーが！」

「してねーっつの！何がイチャイチャだ！！」

「なーに言ってんだ！俺なんか・・・・

『気安く話しかけるな。下衆が。』

だぜ～～～～？・・いや、ありゃいい女だぜ。一本芯の通ったな。」

「頭大丈夫かジャック？マゾかあんた？俺ぁあんなおっかねぇ女見たことねぇぞ。」

「グハハハハハハハ！そーゆートコはまだまだ可愛いガキなんだよなてめーはよ。」

「んっだそりゃ意味わかんねえ。触んなっつーの！勝負すっか？てめ。」

ギャイギャイ

こんな感じだ。なにやってんだか。

「仲いーな。あいつら。」

「おう！？詠春！？いつからそこに！？」

「さっきから居た！気づけよ！」

「すまん。詠春スマン。次からは気をつける。」

「それもう何回も聞いたセリフなんだが！？」

まあまあ、そんなとこに拘るなよ。

そして詠春、アル。頼むからあいつら止めてくれ。町一つ消し飛ぶ。

☆

あれから数日・・・・・・ナギがまたやらかした。またやりやがった。胃が痛い。

なんか外で襲われたらしい。それだけならまだ良かった。こいつは死なないだろうし。

しかし、問題はそこからだ。まさか・・・まさか、アリカ姫を連れて敵の基地を壊滅させるとか・・・。なに考えてんだあいつは！

「お前はなにやってんだこのアフォ！」

「ぐふぁ！」

どうよ。俺だって魔法使えるんだよ！アルに身体強化位教わってる

わ！

「で、でもよ！姫さんもノリノリだったぜ！？」

「うそこけっ！」

「グボア！」

本当に何を考えて「詠春さーん！霧弥さーん！」何だタカミチ。

「あの怖い冷血なお姫様が今、僕に向かってにっこり・・・。僕びっくりしちゃって・・・あ、なんか
ナギさんに御礼を伝えて、だそうです！確かに笑いましたよねっ！？」

「う、うむ。驚いたのじゃ。」

「ハ・・・・・・・？」

「な？・・・それに・・・証拠も見つけてきたぜ。」

「それは・・・！」

そこには、メガロメセンブリアナンバー2である執政官と、完全なる世界との関わりの証拠があった。

☆

俺達はその証拠のことをマクギル議員に話した。

そして議員に呼び出され、マクギル議員と二度目の対面を果たしていた。

「ご苦労だった。証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ・・・・法務官はまだいらっしゃいませんか。」

「法務官は・・・・来られぬこととなった。」

え？

「あれから少し考えたのだがね。せっかくの勝ち戦だ。水を挿すのもどうかと思ってね。」

おかしい。何か違和感を感じる。アーチャー。どう思う？

≪私が思うに、あれは本物ではないな。先日見た彼からは何の力も感じなかったが、今の彼からは強大な力を感じる。たとえ先日は隠していたのだとしても、少しくらいは分かったはずだ。おそらく、彼は偽者だろうな。本物は・・・既に諦めたほうが良いだろう。≫

ありがとう。さすがアーチャー。

≪ふっ。礼は必ずしてもらうぞ？≫

ああ、わかったよ。一日体を貸してやるよ・・・。じゃあ、アーチャー。頼んだぞ。

俺は気づかれないように、アーチャーに体を委ねる。

それに気づくこともなく、議員は言葉を紡ぐ。

「いや・・その・・。私の意見ではない。そう考える物も多いということだ。時期が悪い。時を待つのだ。君たちも無念だろうがここは手を・・・「偽・螺旋剣（カラドボルグ？）」なっ！？」

ドスッと、議員の腹に螺旋状の剣が突き刺さる。

「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」

そしてその剣に秘められた膨大な量の魔力が爆発する。

これにより議員の体は吹き飛んだ。

「ちょ、おま！霧弥！なにやってんだ！」

「いや、詠春。霧弥は間違ってねーぜ。見てみろよ。」

「やはり君は気づいていたか・・・・来るぞっ！」

視点アーチャー

爆発により起きた煙が晴れる。

そこから口元に笑みを浮かべた青年が出てきた。顔はまあ、イケメンと言わざるをえない。

≪イケメンは滅びればいいんだ！≫

「同感だ。」

イケメンなど滅びてしまえ。硫酸の中で溺死しろ。

「・・・良く分かったね『悪魔の多重人格者』。今日はどんな人格なんだい？」

「その呼び方はやめて欲しいのだが。そして私のことはアーチャーとでも呼ぶが良い。」

多重人格なのは霧弥であって、私は多重人格などではないのだからね。

「ちなみに、マクギル議員はもうメガロ湾の底だよ。」

その言葉を聞くや否や、ナギがその男に飛び掛った。

「オラァ！」

私ももう一度偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を放つために投影を開始する。

本来ならばもう少しペースを考えながら投影をしなければならない。

それは魔力が尽きてしまうからだ。

しかし、この世界の空気中には結構な量の魔力があるし、元々居た世界よりも魔力自体の密度が濃い。

それにより、魔力の消費を少なくして投影が出来る。

しかし込める魔力の量は同じなため、壊れた幻想（ブロークンファンタズム）の威力を害することも無い。私にとっては良い世界だ。

「偽・螺旋剣（カラドボルグ？）！」

男に向かって偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を放つ。もちろん、ナギに当たらないようにもするし、後から戦闘に参加するであろうガトウやジャックにも当たらないようにする。

角度は完璧。速度も威力も問題ない。おまけにこちらは死角だ。

当たれば死には至らなくとも致命傷にはなるだろう。そこで壊れた幻想（ブロークンファンタズム）を使えば確実に仕留められる。

まあ、それは敵側に仲間や特殊な能力が無かったらの場合だ。

・・・そして案の定・・敵の仲間は現れた。

「やらせませんよ」

敵の一人が水で偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を飲み込む。

壊れた幻想（ブロークンファンタズム）を発動はしたが、爆発ははるか遠くで起こった。

「くらえ」

そしてもう一人が炎で私とナギたちを攻撃。

ナギたちは平気そうだ。私はこれでも英霊。あの程度の炎ではやられはしない。

「強ぇぞ奴ら！」

「ハッハ。だが、生身の敵だ。政治家だなんだとガチ勝負できない奴らに比べりゃ・・・・。」

ジャックがアーティファクト千の顔を持つ英雄により大剣を出す。

「万倍！戦いやすいぜ！！」

「フ・・・・」

しかし男は攻撃どころか逃げる気配も無い。ただ、薄ら笑いを浮かべている。

何か策があるのか？

「わ、わしだ！マクギル議員だ！うむ、反逆者だっ・・・・」

「げ」

「やられたな。」

・・・まさかマクギル議員の声を使って外に連絡するとは・・・。

これで私たちは立派な犯罪者だな。ナギよ。食料の貯蔵は十分か？

もう一度偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を投影する。

ナギたちも敵に肉薄する。

だが、予め詠唱を終えていたのか、男の放つ石の槍によってその攻撃は阻まれ、逃げられてしまった。

偽・螺旋剣（カラドボルグ？）は数本ある石の槍の三本を破壊し、壊れた幻想（ブロークンファンタズム）により二本を破壊したが、敵には届かなかった。

「くそっ！」

ナギが八つ当たりに壁を殴る。

元々壊れかけていた壁は無残にも崩れ去った。

「あ～あ～。これで俺たちゃ犯罪者だな。まあ、人生波乱万丈なほうが面白いってもんよ」

「そんなに軽いことじゃないぞ。これで俺達は連合と帝国の両方を

敵に回した事になるんだからな。」

冷静にガトウが言う。

だがそれが原因となって場が静寂に包まれる。

その静寂を破ったのは、足音だった。

「居たぞっ！奴らを捕まえろ！もう全国に報告済みだ、逃げ場は無いぞ！」

くっ！連合の兵士か・・・！

「やべえっ！」

「今の所は逃げるぞ！タカミチたちは・・・ゼクトとアルに、詠春も居る！何とかなる！」

「皆。霧弥のいうとおりだ。一先ず逃げるぞ！」

ガトウが天井を無音拳で破壊する。これで何とか足止めになるだろう。

その隙をついて俺達は破壊された窓から脱出した。

やれやれ。昨日までの英雄が一転して犯罪者か・・・。

≪なんかやばいことになったな・・・。≫

他人事だと思って・・言って置くが今の私の姿は君だぞ？つまり犯

罪者は私ではなく君だ。

≪あっ・・・≫

地獄の修行／気に入られた霧弥（前書き）

どうも。まりもです。
今回、先に『神なんて嫌いだ』を投稿しようと考えてたのですが、アイデアが浮かばなかったのでこちらを投稿することにしました。
今回は戦闘がほんの少しだけ入ります。
・・・・今見てみるとテオの戦闘（グーパン）が一番多いような・・・・。
感想、アドバイスなど頂けると嬉しいです。
また、このキャラを使ってほしい！などのご要望がありましたら感想で。
できる限りの事はやりたいと思います。
ちなみに作者が使いたくないのは、ワンピース、ブリーチ、ナルト、トリコ、等です。今思いつく限りでこれだけ。（これは作者にもどうしようもありません。）
こんな作者ですが、どうかよろしくお願いいたします。

地獄の修行／気に入られた霧弥

「俺に稽古を付けてくれ。」

・・・・この一言から・・・・俺の悪夢は始まった・・・・。

俺達は帝国、連合から終われる身になった。

そろそろ、自分の身を守れるくらいの実力は付けないといけないと思う。

普段から色々なキャラに教わってはいるのだが、やはり体は一つし

かないため効率は悪い。

そこで詠春に鍛えてくれと言ったのだが・・・・・

『詠春、俺を鍛えてくれ。』

『別に良いが、なぜだ？』

『いや、自分の身を多少は守れるようにしたいな・・・と。』

『オーイ！何の話してんだー！』

『霧弥が鍛えてくれと言って来た。』

『なるほどなぁ。よし！この俺様が鍛えてやる！』

『いや、ジャック。俺は詠春に・・・ま、待て！し、死にたくない！』

『ハッハッハ！安心しろ！八割殺しで終わる！』

『せめて半殺しで！・・・いや！それも駄目だ！・・・・・あああああ！』

『む、まあ、がんばれ。生きて帰って来い。』

・・・それから毎日。逃亡の合間に修行という日々が続いた。

あ～あ。早くアリカ王女を助けに行きたいな。そうすれば修行も無くなる・・・と思いたい。

そして今もレッツ修行タイム。

「オラオラァ！避けないと死ぬぜ！」

そう言いつつ大剣をブンブンと投げてくるジャック。

なんちゅー人間砲台。死ぬわ！

「くっ！」

俺は頭上へ高速で光の文字を描く。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

言い終わると同時に一気に加速する。この魔法は便利だ。

消費魔力が少ないし、それでいて身体強化においてはこの世界の魔法より強力。

やはり世界が違うと色々と違うらしい。

兎に角、大剣を全てかわし、ジャックとの距離を多少詰める。

「求めるは雷鳴・稲光（イズチ）！」

魔法を放つ。これもこの世界のものではない。

ちなみにこの魔法には人一人を消し炭に出来るくらいの威力がある。

それを容赦なく放つ。・・・・・しかし・・・・・

「おー、あぶねえあぶねえ。」

なぜぴんぴんしているのだろうか、こいつは？化け物じゃないのか？

「我・契約文を捧げ・天空を踊る光の魔獣を放つ」

こいつがぴんぴんしているのは何時もの事なので追撃する。

頭上に光の狼のような物が現れる。そしてその光は全てジャックに襲い掛かった。

「ラカン適当に右パンチッ！！！」

ドカアアアアアン

・・・もう言葉にならない。何だあれ？パンチ？パンチで粉砕したのか？

有り得ない。不可能だ。有り得ない。不可能だ。有り得ない。不可能だ・・・・・

ああもう！チクショウッ！

「求めるは閃光・光燐！」

魔方陣を描き魔法を放つ。

これは稲光を更に強力にしたもので、殺傷能力は段違いに高い。

更に追尾のおまけ付き。さすがにこれなら・・・・

「いってー・・・結構効いたわ。こりゃ。」

うわあああああああああ！全然効いてねええ！

「じゃあ今度はこっちから・・・・行くぜっ！」

☆

「ごふっ、がふっ。」

≪おい、大丈夫か？変わったほうがいいか？≫

歩が声を掛けてくれる。良いゾンビだな。

「いや、まあ大丈夫・・・・」

ジャックの奴やりたい放題やりやがって・・・・。

！？

いや、まて。あのジャックから自力で生還できたんだ。

俺ってひょっとして強くなってる？え？なんか嬉しくなって来た。うわっほーい。

それにしても伝勇伝の魔法は使いやすい。

様々な属性があり、発動までの時間も短い。

実は魔術も使おうと思っていたのだが、まず魔術回路が無いということを思い出し断念。

この世界の魔法はアルに教わっている。まあ、余り使いたくは無いが。

なぜかと言うとまず詠唱が長すぎるということがある。その詠唱の間に稲光がどれだけ打てるかと考えると、効率が悪い。

まあしかし、千の雷や燃える天空などの高威力の魔法は覚えて置いて損は無い。

だからアルには、稲光や光燐以上の威力の魔法を教えてもらった。

まあ、千の雷はナギに教わったが（教え方が下手すぎる。気合でどうにかなるってどう言うこと？）。

まあ、そんなこんなで今日もボロボロだ。しかし、悪いことは重な

る物で・・・・・

「ジャック！霧弥！姫さんを助けに行くぞ！準備しろ！」

「い、いや、待ってくれ・・・・せめて少し休憩をだな・・・・」

「いいじゃねえか霧弥！修行の成果を試せるぜ！」

いや、そう言われてもな・・・・。

いや、でも確かにいい機会ではある。初めて自分の力で戦うのか・・・・。

「・・しゃーない。行くか・・・・。」

幸い、骨までは折れてない。大丈夫だ。

★

「求めるは雷鳴・稲光！」

目の前の敵を稲光で倒す。うむ。やはり使いやすい。

しかしジャックめ・・・俺を夜の迷宮の裏側に放り投げやがって・・・。

なにが『そっちは任せたぜ！がんばれよ！』だ！

≪ほら、さっさと行かないとまた敵が来るわよ！≫

いや、でもなアリア。こんなところに俺をブン投げたジャックへの仕返しを・・・・

≪そんなの関係ないのよ！さっさと行く！風穴開けるわよ！≫

俺の中に居るのにどうやって風穴開けるって言うんだ・・・？

しかし・・・なぜアリアなのだろうか？

なぜか場に合わない奴が出てきたりするのはなぜだ？皆目解からん。

まあ、怖いので先へと進む。

「我・契約文を捧げ大地に眠る悪意の精獣を宿す」

身体強化を掛け、一直線の長い通路をひたすらに走る。

敵はいない。先程の奴等で最後なのだろうか？

と、目の前に壁が現れる。行き止まりだ。

「うわ・・・行き止まりかよ・・。」

そういって引き返す。しかし、その足は次ぎの声によってとどめられる。

≪バカ！さっさと壁をぶち壊しなさい！≫

「何でだよ。」

≪あんたねえ・・・なんで行き止まりなのに敵が居たのよ！？この先に何かがあるからでしょうが！ほら、さっさと壊す！≫

「・・・・・あ！！そうか、すまん。助かった・・・。」

そういい、壁のほうを向く。

「求めるは雷鳴・稲光」

弱めに放った稲光で壁を壊す。

「妾達に何をする気じゃー！」

「ごふぅっ！？」

壁の向こうからようj・・・少女が出てきて殴りかかってきた。

それを顔面で受ける。って言うか避けられなかった。

「このっこのっ！どーせ妾達をまたどこかへ連れて行くのであろう！」

ドカッバキッ

「ゴパッ！？メパァ！？」

≪何よこの子・・・ってその子へラス帝国の代三皇女じゃないの！？≫

なんだってー！？そりゃ凄い大物にゴフゥ！

「・・・・・霧弥・・・じゃったか？助けに来てくれたのか？」

「あ、アリカ王女！そうですよブハッ！助けにブッ！来たんですバァ！？」

「そうか・・・・ナギではないのだな・・・・（ぼそっ）」

ん？なるほど。そういうことか。

「ナギがもうすぐあちら側から来ると思いまブゲラッ！？」

「！！そうか！そうなのだな！？」

なんか元気になって向こうへと向かうアリカ姫。もうナギが大好きなんだね。

「それにしてもブルァ！やめてくれないゴフッ！か？」

痛い。身体強化していても痛いものは痛い。

「む・・・・まあ、敵ではないようだし、許してやるのじゃ。その

代わり妾も連れて行け」

え・・・？戦争してる敵の国の皇女を連れて行けと？いや、まあいいけどさ。

そこっ！ロリコンとか言わない！言わないで！頼む！

「じゃ、じゃあ早くこっちに来い連れて行くから。オイ詠春。一緒に来てくれ。」

「なぜだ？霧弥一人で十分だろう？」

「あれだよ。あれ。」

助けに来たナギとアリカ姫を指差す。いい雰囲気だ。リア充爆ぜろ。

「・・・なるほど・・・分かった。」

「おーい、何が分かったのじゃ？」

「いや、なんでもないなんでもない。」

子供にはまだ早い。

★☆

ひー。イチチ。顔の傷が痛い。くそ。テオ（そう呼べと言われた）め。容赦なく殴りやがって。

あの後隠れ家に戻った俺はずっとテオの遊び相手をしていた。

しかし・・・ことあるごとに顔面を殴るのはやめて欲しい。

実際かなり痛いし、腫れるし、何よりも幼女に殴られるって言うのが精神的に響く。

だってほら。無邪気に笑いながら本気グーパンだぜ？

でもテオに悪気は無いんだよなぁ。だから頭ごなしに叱るって言うのも・・・。

だから出来るだけ平和に遊べるトランプをした。

大富豪、七並べ、神経衰弱、スピード、ばば抜き、などなど・・・。

神経衰弱などテオが気に入ってしまって・・・。神経が衰弱した。

そしてそれからやたらと気に入られて・・・。

最終決戦までテオの面倒を見ろとか言われて・・・・。

断ったらシバくって言われて・・・・・・・グスン

面倒を見たら見たで殴られるし・・・。いや、最近はマシになってきた。

髪を引っ張る程度だ。まあ、ジャックの入れ知恵でろくでもない事も覚えたのだが。

鬼ごっこをすると砂の入った球を投げてきたりするし・・・。

それぐらいならまだいい。だがジャックよ。股間への攻撃は教えるべきじゃないぞ。うん。

いきなり後ろからセコイ蹴りを入れられたときは驚いた。

もちろんジャックは能力をフルに使ってぶっ飛ばした。皆よくやってくれた。

「あはははははは！霧弥！次は何をしようかの？何か面白い遊びはないのか！？」

「う～ん？何かあるかなあ・・・？」

カードゲームなら遊戯王やバトルスピリッツが思いつくが却下。

仮にもテオは皇女な訳だし・・・教育に悪そうだ。

「じゃあ・・・・宝探しでもやるか！いいかテオ。この宝石を隠すから、それを見つけることが出来
たらテオの勝ちだ。宝石もあげよう。やるか？」

これは夜の迷宮で見つけた宝石。深い青色に輝いていて、とても綺

麗だ。

≪え？こんな子供に宝石あげるの？勿体無いわ！私に・・・≫

万年金欠魔術師がなにか言ってるが無視していいと思う。

「おお！妾がすぐに見つけてやるわ！」

「じゃあ隠すから待ってろよ。」

さ～て。どこに隠そうかな。

五分後

「見つけたのじゃ！」

≪くっ！こんな子供に宝石なんて・・・≫

あちゃ～。見つかったか。

トイレットペーパーの芯の中なら見つからないと思ったんだがなあ・・・。

テオは凄い。こういうゲームが超得意だ。本当に皇女なのか？

いや、まあ皇女だからこそ・・かもな。

ずっと王宮で過ごしてきて堅苦しい教育を受けてきたんだろう。
そりゃなんの縛りもない外は楽しいだろうな・・・。
「よしよし、凄いなテオは。」
撫でる。頭を撫でる。こうするとテオが喜ぶ。
「うへぇ・・・・」
顔を綻ばせて笑う。しょうがない。もう少し相手してやるか。
「じゃあ、次は・・・」

完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）との最終決戦まで後数日・・・・。

霧弥の日常（前書き）

今回は日常編です。

マジ感想下さい！感想に飢えてます！

霧弥の日常

ん～・・・ふぁ、朝か。

皆さんおはよう。斉藤霧弥だ。

今日は、紅き翼メンバー全員の休日。なぜかぽっかりと時間が出来た。

テオはジャックやナギと遊ぶらしく、今日は俺が面倒を見る必要は無い。

だから今日は、町へ降りて羽を伸ばそうと思う。金ならある。連合にもらった。

手早く着替え、町に行くと手紙を残して宿を出る。

最近ジャック達が活躍してるお陰で指名手配も無くなった。ありがたい事だ。

さて、まずはどこに行こうか。朝飯を食べに喫茶店にでも行くか。

「いらっしゃいませー」

店員の声が響く。うむ、良い声してるじゃん。

ミルクコーヒーとサンドイッチ。あと、サラダを頼む。

俺は朝は野菜を食べたい人間だ。野菜が多く入っているサンドイッチにサラダ。野菜大量。

新聞を読みながら待つ。最近やっとまともにこの世界の文字を読めるようになった。

えっと、なになに？『紅き翼、各地で大活躍！』・・・ハハハ。頑張ってるね。

む、紅き翼人気投票だと？これは見逃せぬ。確り見ておかねば。

一位・ナギ・スプリングフィールド　１７４６９２票

二位・アルビレオ・イマ　１３７４８５票

三位・青山詠春　９３８５７票

・・・うむ。ま、まあ、この辺は妥当かな？

つ、次だ！つぎ行ってみよぉ！

四位・フィリウス・ゼクト　８６４９２票

五位・ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ　７８４９２票

六位・斉藤霧弥　２６７８票

七位・ジャック・ラカン　２６６４票

・・・・・・・・俺は何も見てない。何も見てないぞ。

新聞をくしゃくしゃにしてポケットにねじ込む。後で焼却処分にしよう。

「お待たせしました。」

「む、ありがとう。」

朝飯がやってきた。これを食べて全て忘れよう。

む、このサンドイッチ野菜も上手いがそこに少しだけ入っている肉が美味い・・・。

サラダも美味いな。良い野菜を使っているんだろう。

食べ終わり、ミルクコーヒーを飲む。

飲み干した後、伝票を持って会計を済ませる。

さ～て。次はどこに行くかな？

ふむ、適当にぶらぶらするか。

町を彷徨う事五分。公園が目に入った。

そうだ、この公園で昼寝でも・・・。そう思い公園に入る。

芝生に寝転がる。そこでふと、ベンチに座る子供が目に入った。

・・・・少し声を掛けてみるか。

「ちょいと少年。」

「え？う、うわ！だ、誰ですか！？」

む、驚かせてしまったようだ。

「ちょ、落ち着け。俺は斉藤霧弥って言うんだ。」

「え？あの紅き翼の？お、おれ、クレイグ・コールドウェルって言います！」

「クレイグか。で、クレイグは他の子達と遊ばないで良いのかい？」

そういうと、クレイグの顔が少し暗くなる。

「おれ、引っ越してきたばっかりで・・友達とか、居なくて。友達がほしくて公園に来たけど、誰も相手にしてくれなくて・・・・。」

目に涙を浮かべるクレイグ少年。

これは年長者として見過ごせぬ。・・・・そうだ！

「クレイグ。俺が少し魔法を教えてあげよう。この世界で俺しか使えない、特別な魔法だ。」

「え？良いんですか？」

「良いんだよ。別に、知られたって困る物じゃないし。」

クレイグの顔がパッと輝く。うんうん。やっぱり子供はこうでないと。

「よし、じゃあ、まず指先に魔力をこめるんだ。・・・ああ、そんなにしなくて良い。多少指先が光るぐらいでいいから。・・そうそう。それぐらい。」

少しづつ教えていく。

「そしたら、空中に俺と同じように文字と魔方陣を書くんだ。」

クレイグが俺のを真似しながら空中に文字を描く。うんうん、うまいぞ。

「よし、書けたな。偉いぞ。」

「へへ、そ、そうかな？」

「そうだ。じゃあ俺に続いて言ってくれ。我・契約文を捧げ大地に眠る悪意の精獣を宿す」

「え！？ええっと・・わ、我・契約文を捧げ・・えっと、大地に眠る悪意の精獣を宿す！」

クレイグの体に身体強化がかかる。

「凄い、体が凄く軽い！戦いの歌よりも強化できてる！魔力もそんなに使ってないし。」

「ははは、その魔法は結構役に立つから、確り覚えるんだぞ。特に魔方陣。」

「分かりました！頑張ります！」

ははは、素直でいい子だなぁ。テオもこうだったらなあ・・・・。

「よし、じゃあ次は稲光って言う攻撃魔法を・・・。」

☆

お昼時。クレイグは稲光を完全に覚えた。子供は覚えるのが早くて助かる。

ちなみに、修行の為の的は先程のランキング結果のページだ。

「じゃあ、クレイグ。俺は他にも行きたいから、この辺でお別れだ。」

「はい！ありがとうございました！」

「じゃあ、また今度会えたらな。風邪ひくなよ。トレジャーハンターになるんだろ？」

「はい！いつか、世界一のハンターになって見せます！」

「はっはっは。頑張れよ。」

そう言ってクレイグと分かれる。いい子だったな・・・。

さて、とりあえずお昼を食べようか。すぐ近くにあったレストランに入る。

「いらっしゃいませー」

店員の声が響く。うむ、良い声してんじゃん。・・・って、何で朝の喫茶店の店員が此処に？

まあ、とにかく今は昼飯だ。腹減った。

「龍肉のステーキとオコジョスープと、適当な飲み物を。」

「かしこまりました。」

店員が去ってゆく。俺は昼は肉を食べたい人間だ。

懐から小説を取り出し、それを読みながら飯を待つ。

小説のタイトルは『エヴァンジェリン・A・K・マグダウェルの憂鬱』。

勇気ある作家がエヴァンジェリンにインタビューしたらしい。
これがまた大人気で。ナマハゲ的な扱いだったエヴァンジェリンの株が少しづつ上がりつつある。よかったね。エヴァンジェリン。

と、読んでいるうちに料理が来た。いただきます。

龍肉のステーキ。龍肉は硬めで、口の中に長く残るが、奥まで染み渡ったたれの味が良く、美味しい。
付いて来たご飯がすぐに無くなる。大盛りにすれば良かった。

オコジョのスープ。オコジョとは妖精ばかりじゃなく食用にも使われる。
一口飲む。美味しい。オコジョの肉を食べる。こちらは龍肉と違い軟らかくて脂が乗っている。これはスープだけでなくステーキや煮物にも使えるのではないのだろうか。

全て平らげた後、紅茶をすする。ほんのり甘くて美味い。

伝票を持ち会計へと向かう。

「３７００ドラクマになります。」

結構高いね。ステーキが原因かな？

店を出て、またぶらぶらと彷徨う。あ、アイス食いてえな。

近くの店でアイスを購入。歩きながら食べる。美味いな、イチゴ味。

少し森に入る。先程何か殺気のようなものを感じたので稲光を打っといた。

お、オコジョが居る。・・・・・捕まえた！

ふむ、先程まで食していた物を抱くというのも中々複雑な気分だ。

それにしても尻尾が長いな。頑張れオコジョ。世界を狙え。

オコジョを逃がす。すぐに見えなくなった。

む、また殺気を感じる。先程と同じ物だ。目を覚ましたか？

「雷の暴風！」

雷の暴風が飛んでくる。

「求めるは閃光・光燐」

光燐で相殺し、

「求めるは雷鳴・稲光」

稲光で攻撃する。直撃した。なんだ、あっけなかったな。

ジャックとの戦闘を生き延びた俺をなめるなよ。

ふああ・・・もう夕方か。宿に戻ろうかな。

ゆっくりと歩きながら宿を目指す。宿に着いたのは一時間後だった。

「霧弥！早く食おーぜ！」

ナギが急かす。少し急いで屋どの食卓に座る。

野菜炒めが美味しい。シンプルだけど美味しい。

「霧弥、今日はどこへ行っていたのですか？」

アルが聞いてくる。

「いや、ただぶらぶらとうろついてただけさ。何もしてないよ。」

「そうですか。」

そのまま食事を勧める。ごちそうさま。

ふう、今日一日、凄く疲れた。寝ようか。

俺はベッドへと入り、すぐに寝た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0780w/

無限の魂を持つ転生者

2011年11月28日06時45分発行